



**Data**

監督・脚本: ユホ・クオスマネン  
 出演: ヤルコ・ラハティ/オーナ・アイロラ/エーロ・ミノロフ/アンナ・ハールツチ/エスコ・バルクウエロ

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

## 👁️👁️ みどころ

ボクシング映画は勇気と感動を与え、人生の指針を与えてくれる。それは『ロッキー』シリーズで明らかだが、「天の時、地の利、人の和」の中、フィンランド初の世界タイトル戦を控えた主人公オリ・マキの今は？

タイトル戦と恋人、どちらが大事？一般論としてはそんな議論もオーケーだが、既に試合に向けて大量の人、カネ、モノが動いている今、そんな選択はないはず。私はそう思うのだが、本作は・・・？

練習と減量はOKだが、肝心の試合は？『ロッキー』では毎回スクリーンの華になっていたその展開は本作ではイマイチ。さらに私は、本作の結末にも邦題の意味にもイマイチ納得できないが・・・。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■ボクシング映画なのに、この邦題は？■□■

ボクシング映画は洋画では『ロッキー』シリーズ（直近では『ロッキー・ザ・ファイナル』(06年) (『シネマ 14』36頁)、邦画では『あゝ、荒野 (前篇・後篇)』(17年) (『シネマ 41』50頁)をはじめとして、すばらしいものがたくさんある。しかし、本作はフィンランド発のボクシング映画！そう思ったが、『オリ・マキの人生で最も幸せな日』という邦題はそのイメージとは全然違うし、チラシには「実在のボクサーの人間味溢れるエピソードに基づく、世界が愛したハートウォーミングラブストーリー！」と書かれているからアレ・・・？

しかし、本作は第69回カンヌ国際映画祭の「ある視点部門」で深田晃司監督の『淵に立つ』(16年) (『シネマ 38』79頁) を審査員賞に押しやり、自らがグランプリを受賞した

名作らしい。そう聞くと、こりゃ、必見！

## ■□■ 1962年、フィンランドで初の世界タイトル戦が！ ■□■

モノクロの16mmフィルムで撮ったという本作は、体重60kg弱のクラスで活躍しているフィンランド期待のボクサー、オリ・マキ（ヤルコ・ラハティ）に世界タイトルマッチのチャンスが舞い込むところから物語がスタートする。『ロッキー』シリーズのデュークのように、オリ・マキのマネージャーとして寄り添い、興行から練習の段取りまですべて仕切っているのがエリス（エーロ・ミノロフ）だ。フィンランドで初の世界戦だから、オリ・マキは誇らしげ。そりゃそうだろう。すると、『ロッキー』のように、マネージャーのエリスと組んでしっかり頑張らなくちゃ。

時は1962年。私が愛光中学に入って間もなくの13歳の時だ。そこで私が今でもハッキリ覚えているのは、蔵前国技館でファイティング原田が当時「シャムの貴公子」と呼ばれていたタイの世界フライ級チャンピオン、ポーン・キングピッチに19歳で初挑戦した世界タイトルマッチ。ラジオで実況放送されたこの試合を私は食い入るように聞いたが、そこで名前通りのファイトを展開し、チャンピオンをコーナーに追い詰め続けた挑戦者は見事に勝利し、新チャンピオンになった。1962年に中学に入ったばかりの13歳の私がこれほど興奮してラジオを聞いていたのだから、フィンランドではじめて行われるオリ・マキの世界タイトルマッチにフィンランド国民の期待が高まったのは当然だ。ましてマネージャーのエリスがその盛り上げに一生懸命なのはあたり前。そうすると、オリ・マキも練習はもちろん、イベントへの参加、出資するスポンサーたちへのサービス等にもある程度は協力しなければ・・・。

## ■□■ ボクサーにとって恋人の存在は？しかし試合前はダメ？ ■□■

戦争映画には基本的に女性は不要で、添えもののように登場するケースが多い。しかし、ボクシングは孤独な個人プレーだから、心の持ちようが大切。そのため、ボクサーの心のよりどころとして、恋人が重要な役で登場することが多い。『ロッキー』シリーズにおけるエイドリアンがまさにそれだ。

しかして、本作では、世界タイトルマッチに向けて猛練習に励むはずのオリ・マキが、ある時ガールフレンドだったライヤ（オナ・アイロラ）に「恋をしてしまった」と気付くところからストーリーは一変していくことに・・・。オリ・マキはそんな気持ちをエリスに打ち明けたが、そこでのエリスの渋い表情は？また、その返事は？それは聞かなくてもわかるはずだ。もちろん、ボクサーにとって試合前に恋人とイチャつく（？）なんて、もつてのほか！

## ■□■ なぜ本作がグランプリを獲得？ ■□■

なぜ本作が、私が星5つを付けた深田晃司監督の『淵に立つ』より上位のブランプリを獲得したの？私にはそれがサッパリわからない。選手とマネージャーとの「確執」は『ロッキー』シリーズでも毎度のように登場する(?)が、いくらなんでも、それがオリ・マキの恋愛優先？それとも世界タイトルマッチ優先？という形で起きるはずはない。私はそう思っていたが、本作では、オリ・マキの恋愛問題が起きた後、何とそんな確執がオリ・マキとエリスとの間で発生していくので、それに注目！

もっとも、オリ・マキの恋愛優先？それとも世界タイトルマッチ優先？そんな露骨な形で問題が噴出することはなく、結局オリ・マキは1人静かな環境で最後のトレーニングと減量に励むことで両者は和解。それはそれでよかったのだが、肝心の本番での試合は・・・？

何と言っても、手に汗握るそのシーケンスがボクシング映画の華だが、残念ながら本作ではそれがなし。なぜなら、本作はボクシング映画ではなく「ハートウォーミングラブストーリー」だから。そう言われればその通りかもしれないが、いくら何でもこの程度の“本番シーン”でお茶を濁すのは、あまりにあまり・・・。

## ■□■この結末に賛成？それとも？私は違和感がいっぱい！■□■

ポン・ジュノ監督の『パラサイト 半地下の家族』(19年)と同じように、本作も「ネタバレ厳禁」らしい。そのため、チラシのストーリー紹介は「国中の注目と期待が集まるなか、自分なりの幸せをつかむために彼が取った行動とは!？」で終えている。したがって、その結末はあなた自身の目で確認してもらいたいが、この結末で『オリ・マキの人生で最も幸せな日』の邦題は如何なもの・・・？また、チラシには「愛おしくて切なくて涙が止まらない。」「泣いて笑って明日からも頑張ろうと、元気が湧いてくる人生賛歌。」「愛とは、人生とは、幸せとは・・・？そんな大きな疑問を優しく切り取ることに成功。」等の評が並んでいるが、私にはこれがサッパリ・・・！

また、新聞紙評で、金原由佳(映画ジャーナリスト)は、「浮き彫りにされるのは、興行としてのボクシングへの違和感である。」「ライト級で活躍していたオリがフェザー級での挑戦を強いられ、減量で厳しく叱咤される場面や、対戦でフィンランド人としての誇りを世界にアピールしたいスポンサーの打診が見えてくる。」と書いているが、これって悪いことなの？これって当然のことでは？また、「夏の陽光の中、自転車での2人乗りに興じ、森を散策し、じゃれ合う恋人たちの情景。周囲はやきもきするが、恋か試合かという単純な選択にならないのがいい。」とも書かれている。しかし、「天の時、地の利、人の和」によって、一生に一度出会うか否かという世界タイトルマッチに臨める千載一遇のチャンスを得たのに、そこで「恋？それとも試合？」という単純な選択をする男などホントにいるの？私のような団塊世代の男にはそんな選択の余地など全くなく、試合一本で進む以外の道はないと思うのだが・・・。そんな確信があるから、私は本作の結末には違和感がいっぱい！

2020(令和2)年2月27日記